

★ 虎姫中学時代の旧友 津布良孝夫君の急逝を悼む

津布良 孝夫君は、わたしの「笠舞雜記」・その一・の冒頭に「旧友として」の序を書いていた。いただいた虎姫中学の同級生である。虎姫中学（旧制）は、滋賀県の名門中学・膳所・、彦根・中学に次いで県下における中等教育の普及・充実を目途に大正九年（1920）、八日市、水口中学とともに開校したわが母校である。創立の大正十四年、第一回卒業生五十八名のうち、二人がいわゆるナンバースクールに入学しており（後年、母校の英語教諭となった湯次了豊先生、わたしの義父、筑田純正、外科医はそれぞれ第三、第四高等学校入学、いずれも故人）、開校当初の教諭たちがいかに熱い教育を施していたかが偲ばれる。十三回生から定員八十名、十八回生から百名前後に増員、さらに戦時下（昭和十七年）の増員で百六十九名が採用され、三組が編成された。津布良君と同じ組に属することはなかったが、一年時の夏であったろうか、父母の云いつけに従って兄とともに長浜別院の教習所で「礼儀作法」などについての宿泊教育を受けその折に津布良君とご縁があった。しかし虎中の津布良三兄弟が美濃の士族土岐氏の末裔「胤教」創建（文正元年、1466）の天台宗寺院（後年、文明十三年、1481 本願寺第八

世蓮如に帰依)の系譜を引く津布良山・称名寺(現住職は第十八代目)の末裔であることを知ったのは随分後のことである。系図によれば称名寺は五百二十年もの古い歴史をもち、蓮如上人、浅井家や秀吉とも親縁があり、貴重な什器、古文書が多く保存されてきた(津布良山称名寺古文書 調査報告書 津布良山 称名寺 長浜城歴史博物館)。わたしも平成二十三年度のNHK大河ドラマ「江―姫たちの戦国」のブームを機に催された所縁の資料を見学した。称名寺に伝承された古文書、宝物の由縁は、孝夫君の熱意と東大の歴史専門家によって整理され「称名寺の沿革」と題して先年出版された(2007年十月)。かれ長年NHK社会部(報道)の要職にあり、さかのぼれば湯川博士のノーベル授賞時のインタービュー、京都・広隆寺の弥勒菩薩半跏思惟像の薬指・破損事件のスカウト、東大紛争(安田講堂の警察vsデモ学生)、よど号ハイジャック事件の実況放送など、歴史に残るビック・ニュースを報道してきたが、「称名寺の沿革」の編纂は、多忙な報道の責を終えた定年後の必定、かつ念願の課題であったのであろう。お互いに人生を遮二無二走っていた時期はお互いに疎遠に勝ちになってしまうものだが、老いれば「昔を語り合いたい」思いが沸々と湧いてくる。こゝ十数年、上京する機会に会食しながら昔話や今の世情の

変わり様を嘆いていた。いつであったか、わたしの講義を受けた学生で後年、茨城中央病院　がんセンター長を勤めた大谷幹伸君が秀吉の重臣大谷吉継の末裔であること（豊臣秀吉の系図学　近江、鉄、渡来人をめぐって―宝賀寿男、桃山堂）を教えられた。称名寺に遺る古文書が津布良、大谷の絆を繋ぐ機縁となったのであろう。津布楽、大谷の二人は、時折、遠い昔を語り合う仲となったのである。

去る一月二十日のお昼ころに孝夫君からお電話を戴き、四方山話の後、「最近わたしが感動を覚えた新刊本…ホモ・デウスの要約をそのうち届けますと」と申ししていたばかりで、いつもと変わらぬ「世上、人心の変わり様にわたしたちの世代は追って行けない、まあ今のところ身体に大きな変わりはないので春、また貴方の上京の折に再会できれば・・・」と長い話を交わしたばかりであった。ところが無常の風は何時やって来るかは分からない。週余後二十八日の夕、子息の直也さんから「父が亡くなりました。知らすべき人として貴方の名がありましたので・・・」との電話があった。二月一日、わたしは新宿↓京王線で高幡不動の「高幡山観音院」に向かい孝夫君を野辺におくらねばならぬ身となったのである。「よど号事件」の実況の録音が再放送されるので若き日のわたしの声を聞いてくれ。”その時の声に劣

らぬ爽快な声で電話してくれた、その君の棺に今日（二月に日）は花をそえねばならぬこととなったのである。出棺に際し長男の直也さんは、亡き父に劣らぬ心情こまやか言葉でお礼を述べられた。「わたしは、幼い頃、滋賀の湖北・尊勝寺・・・の称名寺住職であった祖父が亡くなり、父に連れられ葬儀に参り棺が田圃の路を墓場へと担がれて行く光景をよみがえらせながら、今日はわが父の亡骸を浄土におくらねばならぬことになりました。・・・」との言葉をお聞きした。わたしの脳裡には、明治の薄幸の歌人・山川登美子（小浜出身・与謝野鉄寛の弟子）の「御輿舁く白き衣の丁たち藁靴はきぬいかがとどめん」が浮かんできた。

「字は体を表す」というが、津布楽君の書体は丁寧で整然無比である。温容よく人柄を表しているが、信義の人、悪を許さぬ正義漢であり、一面、湖北人特有の「うい」（憂い、気の毒な）の気持ちの強い人であった。かれは、また習わずして一廉の短歌や秀句を詠む天与の才能を具えていた。二、三を書き添えさせていただく。

言葉には人を支える力あり歌の功德に心慰む

えこひいきせぬそよ風と陽のひかり共にやさしい小春のカップル

つつましく幸せ開くすみれかな

生きてゆくことが挨拶花椿